



TITLE:

静脩 Vol. 35 No. 3 (1999.2) [全文]

AUTHOR(S):

CITATION:

静脩 Vol. 35 No. 3 (1999.2) [全文]. 静脩 1999, 35(3)

ISSUE DATE:

1999-02

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/66027>

RIGHT:

京都大学附属図書館報



静脩

1999年2月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 35, No. 3

Classics in the Libraries of Kyoto University

大学院文学研究科教授 Craik, Elizabeth M.

Seiyokoten is by its nature an old fashioned subject and many of those who study it are old fashioned people, likely to find a card catalogue more congenial than an on-line search facility. That is an excuse. The truth is that the card catalogue is infinitely more user-friendly to people like me, with little or no ability to read Japanese. It is evident that the Kyoto University Libraries Online Public Access Catalogue, with its two modes of search (standard and expert), is a great resource for those who have enough knowledge to use it. The existence of a centralised facility, directing users to the location in different libraries of the books they seek, is to be welcomed as a major step towards rationalisation of scattered material. Kyoto University seems to have a very large number of small libraries, which are autonomous in their organisation. By contrast, the main library does not seem to contain as many books as one might expect. But the reference section on the ground floor there is excellent, and I have found it invaluable.

In the case of classics, the core material is all in the library of Bungakubu, very conveniently situated in the basement of the new

building. I know it is there, because the catalogue tells me so, but I confess that I have not always managed to find the book



I required. Classical literature is so diverse that it impinges on other departmental divisions, especially on (western) philosophy, on (western) history, and on archaeology. And books bought from the funds allocated to these other departments are not shelved with books bought from those allocated to classics. Plato, for instance, belongs in more than one place and has a corresponding range of catalogue numbers. Also, the absence of a centralised purchasing policy leads to both wasteful duplication and unfortunate omissions.

Periodicals are easier to locate, as they are arranged alphabetically; but the reader dare not linger in that part of the basement, where the space-saving expedient of compact sliding shelving induces a terror of being cut in half by a careless or impatient fellow user. Again, pur-

chasing policy seems erratic: there are some short incomplete runs (wasteful of resources). And I wonder if there is a policy on when and how (perhaps even on whether) periodicals should be bound?

Systematic, orderly and consistent classification of its holdings is one of the prime requirements for any library. In the west, two main cataloguing systems are in standard use: the Library of Congress system and the Dewey system; however, some libraries do use their own idiosyncratic methods. In the Bungakubu library, classical literature is arranged according to author: after the main bank of texts (Teubner, Budé etc.) which have the prefix 1, and a bank of collections of fragments which have the prefix 2A, the authors begin. Thus, Aeschylus is 2B Ae3 and Euripides 2B Eu2; duplicate copies are labelled. But how are books arranged under these authors? Texts with commentaries, translations, and works of criticism are mingled, and the main criterion for arrangement seems to be date of purchase. A reader interested in the Oresteia might not notice an important recent commentary on the Choephoroi; and the Euripidean commentaries are similarly not easy to locate among more ephemeral background material. And, inevitably, arrangement becomes still more haphazard where books on

subjects such as society or religion are concerned. There seem also to be delays between the purchase of a book and its appearance on the library shelves.

I am not a typical user of the libraries of Kyoto University. I have been shielded from many difficulties by exceptionally helpful colleagues, and (let it be admitted) by a certain amount of professorial privilege. And I have been able to arrange my work schedule so that I can use western libraries to supplement the local holdings. My lack of Japanese is not typical, but neither is it unique. Japanese users, and those with a good knowledge of kanji, doubtless navigate the labels on the shelves with ease. However, there must be many visitors who quietly despair of ever finding even the section they are looking for, never mind a particular book in that section; and the problems of using the online catalogue are formidable.

Still, Kyoto has one of the best – perhaps it is the very best – of classical libraries in Japan and on the whole I have been more surprised to find works present here than absent; and have welcomed the opportunity to browse on the open shelves. The problems of fragmentation which I have encountered relate more to general library arrangements than to problems in my own discipline. (クレイク、エリザベス メアリー)

古代メソポタミアの粘土板

人文科学研究所教授 前 川 和 也

もし、〈書物〉を、文学作品などが印刷されている複数の紙葉が綴じあわされているもの、と定義してしまえば、古代メソポタミアの粘土板はとうてい〈書物〉(しょもつ)とは言えません。さしあたって、ここでは〈書物〉を〈書かれたもの〉、つまり文字、文章が記録される媒体を指すというふうに、もっともゆるやかに理解しておきましょう。じっさい、世界の歴史のなかでは、東アジア世界をのぞけば、さきほどの厳密な定義に合致するような〈書物〉(しょ

もつ)を利用できたのは、かなり新しい時代にはいつてからのことなのです。いっぽうで粘土板は、紀元前4千年紀の末から紀元後1世紀後半まで、記録媒体として用いられました。粘土板は、さまざまな書写材料のなかで、もっとも長いあいだ利用されつづけたのです。

現在までに発見されている粘土板の総数は、50万枚ちかくにのぼるでしょう。前1千年紀、新アッシリア帝国時代の浮き彫りには、セム系アラム語アルファベットを羊皮紙に書き写して

いる書記と、ワックスをかけた木板に楔形文字を書きこんでいる書記とが並んでいるシーンがしばしばみられます。けれども、それ以前のメソポタミア社会では、記録媒体は基本的には粘土板でした。シュメール語やアッカド語が、楔形文字で粘土板に刻みこまれたのです。新アッシリア時代でも、木板の楔形文字は、のち粘土板に書き写されたはずです。

最古の粘土板は、前4千年紀の末から3千年紀はじめにかけてのシュメール遺跡ウルクで発見されています。ウルクから出土した数千点の粘土板のうち、8割以上は行政・経済文書です。王宮や神殿の奴隷や家畜を数え、穀物の量をはかり、耕地の面積を計算するために、粘土板記録が成立したのです。ウルク古拙文書のうち、あとの約2割ちかくは「リスト」です。同ジャンルの言葉（たとえば官職名）が羅列されているのです。書記養成の教材として、「リスト」が成立したのかもしれませんが。官職名「リスト」にいたっては、その後約千年にわたって、同一内容のテキストが西アジア各地で書かれつづけます。言及される諸官職の順番さえ、最初期の「リスト」での原則が厳密に守られています。

いっぽう、王碑文といった政治的記録や文学テキストなどの成立は、前3千年紀の中頃まで待たなければなりません。なお、王碑文や土地・家屋の売買契約は、しばしば彫像、石板、石柱、粘土〈釘〉、石製・粘土製容器など、粘土板以外の媒体にも刻みこまれるようになりますが、いうまでもなくこれらは二次的な発展です。

最古のテキストのおおくが行政・経済文書であったという事実は、その後の粘土板記録の歴史を象徴しています。出土した約50万枚の粘土板のうち、9割が行政・経済記録でしょう。したがって粘土板記録を保存する場合は、まず文書庫（アーカイヴ）なのであって、図書館・図書館（ライブラリー）といえるような施設は、数多くは存在していなかったにちがいない。メソポタミア都市とりわけ前3千年紀のシュメール都市には、かならず公的な文書庫があって、そこには多数の行政・経済文書が収められていたはずですが、残念ながら、考古学者によって文書庫がきちんと発掘された例は、きわめてまれ

です。だから、1970年代にイタリア隊がシリアのエブラ遺跡で前3千年紀後半の文書庫と数千枚にのぼる粘土板を発見したというニュースは、すぐに世界中に大々的に伝えられたのです。

いっぽう、図書館と定義できる遺構の発見は、前1千年紀のメソポタミアに限られています。前2千年紀のはじめ（シュメール文化が減んだ直後の時代です）の南部メソポタミア都市、とりわけウルやニップールからは、大量のシュメール文学テキストが出土しています。けれども、これらは図書館跡ではなく、私的な諸家屋（おそらく私塾）跡から発見されているのです。これらは、書記養成のための教材や生徒の練習テキストです。当時、私人が趣味で文学テキストを集めていたとはとうてい思えない。いっぽうで書記の卵たちは、シュメール語をじつに熱心に勉強していました。

さて、われわれが知っている最古のシュメール文学テキストは、おそらく前26世紀に成立していますが、これらのほとんどは「ことわざ」集成です。では、なぜ最初に粘土板に書かれた文学テキストが知恵文学ジャンルに属していたのでしょうか。一部の研究者は、叙事詩や知恵文学は、粘土板に書き写される以前に、口頭伝承の長い歴史をもっていたことを証明しようとしています。前26世紀に書かれた短い叙事物語的なテキストも、1点だけですが、見つかっています。けれども、これらは例外的な発見です。前2千年紀以前にシュメール語で書かれた文学テキストの数は、ごく少ないのです。これは偶然なののでしょうか。図書館跡が発見されていないからなののでしょうか。そうではなく、口頭伝承が、シュメール時代が終わるまで続いたからだと考える人さえいます。前2千年紀にはいて、セム人の書記たちが、シュメール文学をいっせいに文章化したというのです。

現在のわたしには、これらの問題に答える能力はありません。ここでは、われわれが、〈書物〉（しょもつ）という語で想像できるような文学作品を記録するために粘土板が成立したのではないという事実だけを、くりかえしておくにとどめます。（人文科学研究所1998年夏期講座「モノとしての書物」より）（まえかわ かずや）

イギリスの図書館ネットワーク： 英国図書館・イギリスの大学図書館訪問記 ①

英国図書館新館 (The British Library at St Pancras)

工学研究科・工学部電気系図書室 呑 海 沙 織

1. はじめに

私にとって、英国図書館はずっと「不思議な図書館」でした。なぜなら、日に1万4千件以上の世界各国からの文献複写依頼を、脅威的なスピードで処理しているからです。「どうやって処理しているんだろう」と私の中で疑問はふくらむばかりでした。そして4年前、実際に英国図書館文献供給センター (The British Library Document Supply Centre) を見学するためイギリスへ足を運びました。そしてそのときから、英国図書館は、私の中で「不思議な図書館」から「魅力的な図書館」へと変化し、イギリスの図書館へも関心を向けるようになったのでした。

このたび、1998年11月1日より2週間、「平成10年度京都大学後援会助成金第1類第1種 (海外派遣)」の助成により、イギリスへの研修派遣の機会を得ました。大きな期待を胸に、下記の図書館を見学することができました。

- 1) The British Library
 - ① The New Library at St Pancras
 - ② The Science Reference Library
 - ③ Document Supply Centre
- 2) The Institute of Electrical Engineers Library
- 3) Oxford University
 - ① Old Bodleian Library
 - ② New Bodleian Library
 - ③ Radcliffe Camera
 - ④ Radcliffe Science Library
- 4) Cambridge University Library
- 5) Leeds University Library
- 6) UMIST Library
- 7) Imperial College
 - ① Imperial College Library
 - ② Science Museum Library
 - ③ Electrical and Electronic Engineering De-

partment Library

- 8) Birkbeck College Library

2. 目的

イギリスにおける図書館は、長い歴史をもっています。日本では1900年頃、公共図書館が15館しかなかったのに対し、イギリスでは、1910年頃には、ほとんどの市や町が公共図書館をもつようになり、1930年代には、図書館未設置の地域はほとんどなくなっていたといえます。そしてそれらの図書館は、ただ個別に設置されたわけではなく、それから1970年代にかけて、公共図書館の全国システムが構築されたのでした。また、大学と運命をともにする大学図書館も、オックスフォード、ケンブリッジの歴史が中世にさかのぼることからみても、とても古い歴史を持つものであることがわかります。そして、古い歴史を持つ図書館は、古い貴重な資料を所蔵しています。

電子図書館ということばをキーワードに、今、図書館界は、あらゆる意味で過渡期にあります。イギリスでも、英国図書館のDigital Library Programme、大学図書館を中心とするeLib Programmeなどの電子図書館プロジェクトが存在します。このような状況の中、古い歴史を持つイギリスで、新しい技術と古い伝統・資料がどのように融合されているのかを調べるのが第1の目的です。

また、イギリスでは多くのライブラリ・コンソーシアムがあります。ひとつの大学図書館が複数のライブラリ・コンソーシアムに参加していることも珍しいことではありません。電子ジャーナルやオンライン・データベースの導入に伴うあらゆる面でのコスト問題に最も有効であると思われる、このライブラリ・コンソーシアムの実態を知るのが第2の目的です。

そして、4 年前に訪れたとき工事中であった英国図書館新館の見学が、イギリス訪問第 3 の目的です。

3 準備

準備はすべて、インターネットを利用しました。情報収集は、Web ページから行い、訪問機関とのやり取りはすべて、電子メールを使いました。

特によく利用した Web ページは、'University of Wolverhampton UK Sensitive Maps' と 'RAIL TRACK' です。'Sensitive Maps' は、イギリスの高等教育・研究機関の地図に各機関の Web ページや情報がリンクされているページですが、各機関間の大雑把な地理関係などの情報をつかむのに、重宝しました。'RAIL TRACK' は、出発駅と目的地を入力すれば、時刻表と所要時間がわかるページで、スケジュールをたてるのにとても便利でした。最寄の宿泊施設なども、いくつかの Web ページで参照することができました。

電子メールも、つくづくその便利さを実感しました。電子メールを出すと、すぐに返事がかえってくることが何度かあったのですが、すぐに応対してくださるという気持ちの暖かさを感じるとともに、電子メールの手段としての速さ・簡便さを心から感じることができました。電子メールの利用には思わぬ副産物もありました。回を重ねるごとに、用件以外にお互いの図書館の様子、趣味や好み、考え方などを少し書き加えるようになったのです。そうして、実際にイギリスでお会いしたときには、なんだかずっと前から知り合いだったような錯覚を感じました。手紙や FAX や電話では、こうはいかなかっただろうと思い、時代の恩恵を感じます。

たくさんの方のお力添えで、多くの図書館を見学し、いろんな方と知り合い、さまざまなことを考えさせられた 2 週間でした。書きたいことはたくさんあるのですが、今回は、英国図書館新館について、報告します。

4 英国図書館の歴史

英国図書館 (The British Library) は、イギ

リスの国立図書館です。1972 年に法律第 54 号として英国図書館法 (The British Library Act) が制定され、1973 年に、大英博物館図書館 (The British Museum Library)、国立中央図書館 (The National Central Library : NCL)、国立書誌局 (The British National Bibliography : BNB)、国立科学技術貸出図書館 (The National Lending Library for Science and Technology : NLLST)、国立科学発明参考図書館 (The National Reference Library for Science and Invention : NRLSI) などがひとつの組織にまとめられ、設立されました。

機構としては、まだ新しい図書館といえますが、その歴史は 18 世紀に設立された大英博物館 (The British Museum) にさかのぼることができます。そして、そのコレクションの源となったのは、10 世紀から積み重ねられてきたイギリス国王の蔵書です。

ちなみに国立図書館とは、国が設立・運営する図書館で、国内の出版物を網羅的に収集し保存する、国民全体を利用対象とする図書館です。日本では、1948 年に設置された国立国会図書館がこれにあたります。

The British Library は、「英国図書館」の他に、「大英図書館」「ブリティッシュ・ライブラリ」「BL (ビー・エル)」などと呼ばれていますが、ここでは「英国図書館」という表現を用います。

5 二つのサイト

英国図書館は、大きく分けて、二つのサイトに分けられます。「ロンドン・サイト」と「ボストン・スパ・サイト」です。ボストン・スパは、ロンドンから電車で 2 時間半のヨークから、さらに車で 20 分のところにあります。都会のロンドンとは対照的な田園地帯です。この二つのサイトに、英国図書館のはっきりした目的意識をうかがうことができます。

ロンドンは、便利な場所である反面、地価や人件費が高いというマイナス面をもっています。そこで、図書館のうち、ロンドンにある必要のないものはすべて、ロンドン以外に移してしまおうということになりました。地価・人件費が安いこと、国土の中央にあり国内であれば 1 日

で郵便物が届くということ、等の理由から、ボストン・スバが選ばれました。

現在、利用者への直接サービスに関わる業務、例えば閲覧・レファレンス等のサービスはロンドンで行い、ロンドンにある必要のない間接的サービス、例えば、文献複写サービスや書誌サービス、コンピュータ・通信関係、データベース構築などの業務は、ボストン・スバで行われています。この、機能分担と地理的分担の見事なまでの融合は、理論的な英国図書館の凜然とした戦略がうかがえます。

さて、「ロンドン・サイト」ですが、組織的に一つであるとはいえ、その歴史的経緯から、長らく地理的・機能的には十数カ所に分散したものでした。資料の劣化などの資料の保存問題、増え続ける資料のスペース問題、資料の分散問題などから、場所として一つにまとまった図書館の必要性は早くから唱えられていました。セント・パンクラスの新図書館用地は、英国図書館が組織として設立されてから、わずか3年後の1976年には購入されていたのです。1982年にやっと新館の建設が始まり、15年の歳月を経て、1997年、他の閲覧室に先駆けてまず、人文科学閲覧室が公開されました。これを初めとして、段階的に移転がなされ、今年（1999年）中ごろにはすべての移転が終了する予定です。なお、1513年に発行された最初のニューズレターを所蔵するロンドン北部のコリンデールにある新聞図書館は、新館に移る予定はありません。

6 新しい英国図書館

昨年（1998年）6月25日にエリザベス女王を



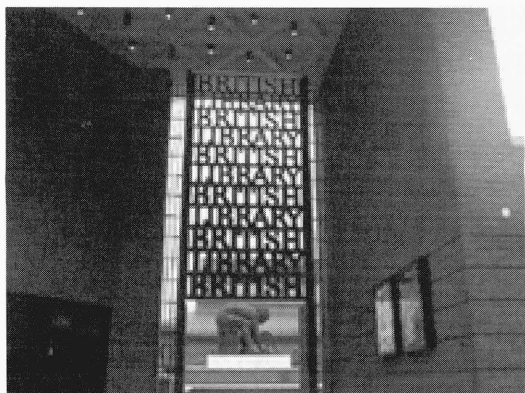
迎えて、英国図書館新館の公式なオープニング・セレモニーが行われました。新館が開館されるまでは、建設に反対する声もあったようですが、開館されてからは、ロンドンの新しいランドマークができたと言われ歓迎する声に変わっていったそうです。最終的には、まだ開室されていない閲覧室があるにもかかわらず、来館者は44%、閲覧許可証の発行は50%増加したということです。ちなみに、新館の真向かいのパブも、新館が開館されてから大繁盛しているということで、実際金曜日の夜は、少し身体を動かすと隣の人にぶつかるくらいのおおにぎわいでした。

ロンドンにはいくつか大きな駅がありますが、そのひとつが、セント・パンクラスです。1867年に建設されたこの駅は、落ち着いた赤いレンガでできた優雅な建物です。この駅に使われたのと同じ素材で作られたレンガが、英国図書館の新館に使われています。

'BRITISH LIBRARY'と、すかしのはいった門をくぐると、落ち着いた赤いレンガの美しい建物が目の前に現れます。これが英国図書館の新館です。図書館の入口を入ると、右正面に受付カウンター、左正面に大きな階段があり、その上に閲覧室に続くエスカレーターが見えます。白を基調とし、自然採光をとりいれた明るい広々としたエントランスです。

建物は、地上8階・地下4階で、11の閲覧室、展示室、会議室、講堂、ブックショップ、レストランなどがあります。特徴的なのは、建物の真中をつらぬくような形でそびえているガラスばりの王立文庫タワーです。この王立文庫は、ジョージ4世によって国家に下賜されたジョージ3世（1760-1820）の蔵書です。11の閲覧室は、3階にわたって配置されていますが、どの閲覧室も、この階を貫いた王立文庫の左右に位置する形になっています。閲覧室を出ると、どの階からも王立文庫が目に入るというような、シンボリックな存在です。

各閲覧室は、落ち着いた深い緑色が基調になっています。天井が高く、空間を意識した広々とした造りになっていて、自然光をとりいれながらも、直接光が入らないような設計になっています。木目を生かした閲覧機の表面と椅子は、



深い緑色のレザー張りです。また、同じレザーが、ドアのノブに巻かれているという凝りようでした。各閲覧席には、情報コンセントがついています。ポータブル・コンピュータの持込が許可されており、インターネットに接続することもできます。何時間でもここにいたいと思わせるような空間でした。

7 リーダーズ・パス（閲覧許可証）

ところで、これらの閲覧室には誰もが入れるわけではありません。セント・パンクラスの新館は、公共のレファレンス図書館ではなく、研究図書館であるためです。その所蔵資料を必要とする研究者あるいは、他の図書館では入手できない資料の利用を希望する者が申請を行い、閲覧許可証（Reader's Pass）が発行されて初めて利用が可能になります。閲覧許可書発行時には、図書館を利用する理由や研究分野について問われます。閲覧許可証の期限は、通常5年です。原則的に、18歳以上の利用者のみに発行されますが、18歳以下でも、妥当な理由があれば短期間の閲覧許可証が発行されます。

特定の利用したい資料がある場合は、まず館内のOPAC（オンライン図書館目録）で調べます。そうすると、その資料がすぐに利用できる状態であるかどうかを知らせてくれます。セント・パンクラス以外に所蔵されている資料も、48時間以内に入手することができます。またその際、この閲覧許可証のナンバーを入力し、次回来館する日付を指定しておく、そのときに資料が用意されている仕組みになっています。

8 入館料徴収問題

英国図書館による閲覧室利用者への入館料徴収問題は、さまざまな議論の末、1998年9月、当分の間入館料は徴収しない旨の最終決定がなされました。英国図書館は、世界中でもっとも収入をあげている国立図書館で、予算の3割以上を自館の収入でまかっています。にもかかわらず、新館建設に膨大な費用を費やしたため、年2000万ポンド（約40億円）の資金不足に陥っています。このため、コスト削減や収入増加のための方策を考えなければなりません。このコスト削減の一案として、「入館料の徴収」があげられていたのです。これには、強い入館料徴収反対のキャンペーンをはじめ、あちらこちらから、反対の意思表示がなされました。

また、英国図書館自らが、今後5年間の英国図書館に対するアンケートを行ったところ、入館料の徴収に賛成する人はごくわずかであることがわかりました。いまでも、図書館が無料で利用できるのは当然だと考えられていますが、はじめから誰もが無料で図書館を利用できていたわけではなく、これは、先人たちが勝ち取ってきたもののなのです。図書館にとって、無料で資料を提供するのは、すべての人に平等に資料を提供するというその役割からも、根本的なものであると思う私は、この「入館料徴収せず」という決定を知って、ほっとしました。今年（1999年）から、欧州連合（EU）15カ国のうち、11カ国で新通貨ユーロが導入されましたが、イギリスは当面不参加を表明しています。2002年の選挙後に国民投票で参加するかどうかの決定をすることになっているようですが、重要な決定には、国民の意思を問う土壌ができあがっているように感じます。

9 国民の理解を求めて

英国図書館新館は、ロンドンの新名所になりつつあります。けれども、なんとなくそうだったわけではありません。ところどころに、英国図書館のマーケティングと広報活動の巧みさ、思考の柔軟性を感じることができました。まず、図書館には三つの常設展示場があり、誰でも無料で入ることができます。ここでは、マグナ・

カルタを初め、「地下の国のアリス」のオリジナル原稿、ビートルズの原稿など、魅力的な資料が展示されています。視覚資料にとどまらず、たくさんの録音資料も公開されています。私はナイチンゲールの声を試聴してきました。ブックショップには、英国図書館に関する図書や英国図書館グッズも販売されています。また、英国図書館の資料をより有効に利用するために、そしてより興味を深めるための市民講座も開かれています。

なかでももっとも興味深かったのが、図書館で行われたダンス・ショーです。'Dance Umbrella' というダンス・グループが図書館という建物を舞台に幻想的なショーを繰り広げました。図書館の廊下、階段、オープン・スペースに、シンプルな衣装をつけたダンサーが、本や新聞を使って踊るのです。ダンスと音楽と白い壁に映し出される画像が不思議な空間を生み

出していました。このショーは、5日間にわたり、図書館閉館後に行われましたが、チケットはあっという間に売り切れたそうです。私をこのショーに招待してくださった図書館員の方の言葉が印象的でした。「わたしはこんなにすばらしい図書館で働くことができて幸せです」。ショーの後、楽しそうに帰って行く人々を見ながら、この人達もきっとだんだん英国図書館の支持者になっていくに違いないと思いました。

この新館の立ち上げには、さまざまな計算ミス、多くの反対、それに伴う工事等の遅滞があったと聞きました。現状から、とりあえず今何ができるかを考えることも大切です。けれども、はじめに明確なビジョンを掲げ、その実現に向かって邁進する英国図書館の姿を、私はとても眩しく感じました。

今回は、イギリスの大学図書館について報告する予定です。 (どんかい さおり)

経済学部図書室紹介

—シリーズ「京都大学図書室巡り」—

経済学部図書室に所蔵する珍しい本、そうです！お宝を紹介しましょう。

その筆頭は、やはり「上野文庫」^{注)}でしょう。

「上野文庫」は、朝日新聞社主であった上野精一氏(1882-1970)が収集された書籍と新聞関係資料から成り立っています。幕末・明治初期の新聞が、経済学部図書室4層の貴重書を納めた書庫の中にあります(図1)。帙に包まれた新聞を取り出してみました。『官板バタヒヤ新聞』・『京都新報』・『官許琵琶湖新聞』などなど。どれも和綴です(図2)。私たちの新聞に対してもっているイメージとは大部違います。

『朝日新聞』の第1号もあります(図3)。“明治12年1月25日(土)”という発行日付です。こちらは、現代の新聞と同じような体裁ですが、大きさは今のより小さいです。

アダム・スミスの『国富論』初版(1776年)2版(1778年)も貴重です(図4)。

4層の貴重書庫の中には、河上文庫として経済学部教授であった河上肇(1879-1946)の旧蔵書もあります。河上の手による書き込みのある図書・自筆ノート・原稿、ここにも経済学部

に長い時間が流れているを感じさせます。1層の一般図書書庫には、地方史誌関係の本が多数あります。日本中を北から南まで、いろいろな地域の史誌類が収集されています。古書店で相当に高価な値段の付いているような本が目白押しです。挿絵や写真図版を眺めていると、不思議な風景、懐かしい情景を見ることができ

ます。無論、経済学部図書室には最新の経済学関連の書物が多数収集されています。今回は視点を変えた経済学部図書室案内です。書庫の中には残念ながら経済学部教官・大学院生以外は入れません。目録で検索の上、利用したい本をご覧ください。

では、一度経済学部図書室にいらしてみてください。

(文：経済学部整理掛 菅 修一

写真： 同 中尾佳樹)

注)「上野文庫」に関して『静脩』においては既に次の文献で紹介されています。

- ・「資料紹介——経済学部 上野文庫について」『静脩』vol.2(4)(1965)p.25

- ・「図書室めぐり——経済学部図書室：特殊文庫を中心として」同上 vol.15(3)(1978)pp.4-5
- ・高橋俊哉「上野文庫 1 冊のインキュナビュラについて」同上 vol.16(2)(1979)pp.5-6
- ・平井俊彦「上野文庫」同上 vol.25(2)(1988)pp.3-5



図1 4層の貴重書庫



図2 官版バタビヤ新聞



図3 朝日新聞 第1号

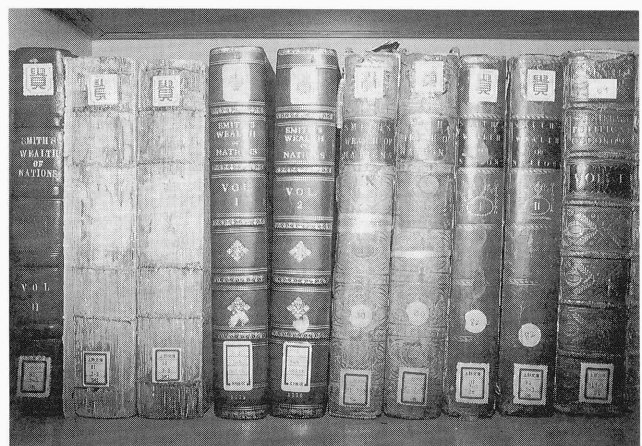


図4 アダム・スミス『国富論』初版・2版

物理学教室図書室における図書貸出・返却新システムの稼働

理学部物理学教室図書室 西 尾 淑 子

理学部物理学教室で図書貸出・返却新システムの稼働を開始して、ほぼ半年が経過しました。この新システム導入が、図書室の利用者と職員にもたらした変化を報告します。

従来物理学教室図書室では図書の貸出は、利用者の手書きによるセルフサービスになっていました。利用者は書架から図書を取りだし、カウンターにある2枚複写の借用簿に必要事項を記入。職員は借用簿の1枚を代本板に利用し、返却時には利用者が自分で図書を書架に戻して、借用簿に返却日付を記入するという方式でした。

図書貸出冊数、貸出期間について利用規程はありますが、規程はほとんど守られておらず、借用簿はカウンターにたまる一方でした。返却請求は、学生アルバイトと職員が定期的に行うとともに、年1回程度図書委員会を通じて、研究室に返却請求をするなどいろいろ工夫をしていましたが、手書きの借用簿は判読し辛く、返却請求は経費と時間のかかるストレスのたまる仕事でした。

利用者には、借用簿への記入と、返却時に多くの借用簿の中から該当のものを探し出すという面倒をかけていましたし、新たな利用者には、欲しい資料がその場で見られないなど多くの不便をかけていました。

数年前から物理学教室図書委員会で図書業務の機械化が問題になり、図書の借用・返却方式についても「…利用者に非常に不便である…」と厳しく指摘されていました。機械化の必要性は十分理解していてもどのようにすればいいのか皆目見当がつかず、附属図書館の次期システム時になんとか一緒に導入できたらと思っていました。

貸出システムの前提になる図書の遡及入力については、附属図書館の京都大学特殊コレクション文献データベース作成事業に参加すると

ともに、教室からも経費をいただき平成9年8月から12月の4ヶ月で終えることができました。そして、平成10年4月からの附属図書館の新貸出システム運用開始に続き、6月から物理学教室図書室もシステムによる貸出業務を開始しました。

物理学教室図書室での貸出システム導入にあたっては、個人のプライバシーが守れること、さらに、当教室の大学院生以上の構成員については、従来通りセルフサービスでの24時間利用が可能なこと、この2条件を考慮しました。

新システムでは、利用規程の貸出冊数、貸出期間がコンピュータに設定されているので、貸出条件をオーバーした場合、そのことを機械が利用者に知らせ、貸出を停止します。返却請求業務に関しても、瞬時のうちに必要な督促帳票などが出力されます。これで、業務の簡素化はもちろんのこと、常に一定の図書が書架に並び、利用したい人が利用したいときに利用できるといった環境が整いました。また、遡及入力によって、何十年も人目に触れず利用されなかった図書に、学外からも利用希望が来るようになりました。

機械化のために費やした4ヶ月とその前後の日々は、嵐の中にいるような大混乱の日々でしたが、この混乱の極みの日々は、附属図書館、理学部、物理学教室、そしてその他の多くの方々に支えていただいて、無事乗り切ることができました。

このような経験ができたことに、心から感謝しています。一日の業務を終えて図書室を退出するとき、真っ暗になった閲覧室を振り返ると、カウンターの上のパソコンの画面に「単行本貸出・返却用端末です。」という赤いテロップが滑るように静かに流れています。

(にしお としこ)

外国語雑誌目次データベース (SwetScan) の提供を始めました — 利用の手引きシリーズ —

京都大学電子図書館システムでは、学内向けのサービスとして、ネットワーク対応版CD-ROMや電子ジャーナル35タイトルの試行提供等を行っていますが、平成11年1月11日から外国語雑誌目次データベースの提供を新たに開始しました。

このデータベースは、オランダのスエッツ社が制作する主要な外国語の学術雑誌の最新号の目次情報です。人文科学、社会科学、自然科学にまたがる約18,000タイトルを収録しています。

電子図書館ホームページ (<http://ddb.libnet.kulib.kyoto-u.ac.jp/minds.html>) から利用できます。提供する機能は次のとおりです。

1. 検索機能

論文名、著者名、雑誌名などを対象とした検索や、検索した雑誌の京大での所蔵の有無を確認できる OPAC 参照機能を備えています。

2. SDI 機能 (3 月末提供予定)

利用者自身が登録した複数の検索式で週単位あるいは月単位に自動的に検索を行い、その結果を利用者に電子メールで送信してくる機能を備えています。

The screenshot shows a web browser window with the URL <http://ddb.libnet.kulib.kyoto-u.ac.jp/swet/retrieve/japanese/search.htm>. The page is titled "検索画面" (Search Screen). It contains a search form with the following fields and examples:

検索項目	検索条件	検索結果
論文名	<input type="text"/>	例) economy
著者名	<input type="text"/>	例) Charles
雑誌名	<input type="text"/>	例) society
発行年月日	<input type="text"/>	例) 1999*
ISSN	<input type="text"/>	例) 09188297
登録年月日	<input type="text"/>	例) 19980101 から 19981231

項目間検索条件: ☐ AND ☒ OR ☐ 表示方法: ☐ 書誌一覧 ☒ 書誌一覧

※以下の条件で入力を行った場合は、表示方法の選択に関係なく「書誌一覧」が表示されます。
 → 論文名、著者名を入力している場合
 → 項目間検索条件でORを選択し、かつ論文名、著者名以外を指定している場合

SwetScan 検索画面

DigitalBook Creatorの提供を始めました

—利用の手引きシリーズ—

京都大学電子図書館では、テキスト型コンテンツの専用閲覧ソフトとして富士通社製 Info-Brick を学内の電子図書館用専用端末で使用してきましたが、平成11年1月から KUINS に接続された Windows 95 の端末から利用できるように、マイクロソフト社製ブラウザ Internet Explorer に対応した富士通社製プラグイン DigitalBook Creator の提供を始めました。

これにより、ブックメタファ（コンテンツを「本」の形式に表示する等の機能）をはじめとした数々の読書支援機能が利用できます。電子図書館ホームページ（<http://ddb.libnet.kulib.kyoto-u.ac.jp/minds.html>）からダウンロードして使用してください。

制限事項、提供機能等は次のとおりです。

【使用許諾】

『DigitalBook Creator』（以下、本プラグイン）は京都大学内で、京都大学電子図書館システムを閲覧する目的に限りご利用いただけます。

したがって、二次配布については認められていません。

【動作環境】

本プラグインは、Microsoft (R) Windows (R) 95の以下のソフトウェアで動作するプラグインです。

—Microsoft Internet Explorer 3.02 (Windows95日本語版)

—Microsoft Internet Explorer 4.01SP1 (Windows95日本語版)

※ Microsoft Internet Explorer 4.0 (Windows95日本語版)では正常に動作しません。Microsoft Internet Explorer 4.01SP1 で利用ください。

※ MacOS および Netscape (R) Communicator については対応予定です。

【提供機能】

本プラグインで、以下の電子読書支援機能が利用可能となります。

(1) ブックメタファ

参照する図書を画面上に「本」形式で通常の本を読む場合と同様に見開きで表示し、ページをめくる操作で読書することを可能にした機能。

「縦書き」を意識した情報は、縦型に表示することも可能。

(2) 付箋

読書中の情報に付箋をつけて、それらに注釈などを書き込むことを可能とした機能。

付箋を設定した場所は「見開き」表示された図書に表示。複数の付箋間にリンク関係を設定可能。

(3) 音声朗読

読書時に音声朗読を開始する箇所を指定することにより、テキストを音声で得ることが可能。

(4) 機械翻訳支援

読書時に機械翻訳を開始する箇所を指定することにより、テキストの翻訳結果を得ることが可能。

※ この機能を利用する場合は以下のソフトウェアが別途必要です。

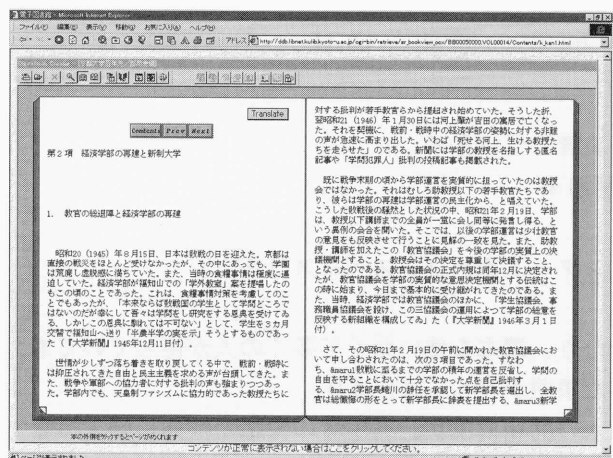
富士通 ATLAS EJ V4.0(型名：B298C4051) 富士通 ATLAS JE V4.0(型名：B298C4061)

(5) 辞書参照

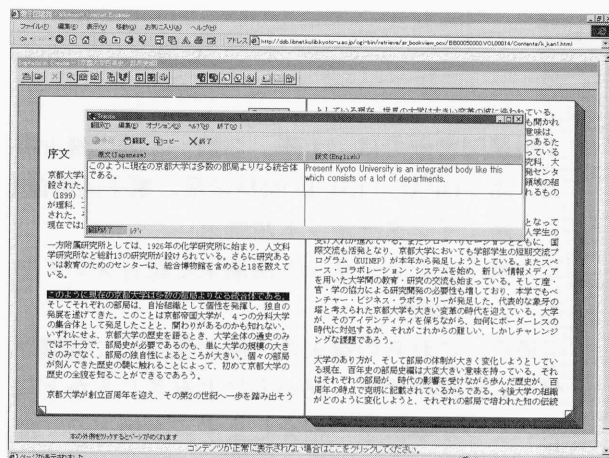
確認したい言葉と参照する辞書を選択して言葉の意味、内容を確認可能。

※ この機能を利用する場合はパソコン本体の CD-ROM 装置に EPWING 形式の CD-ROM が別途必要です。

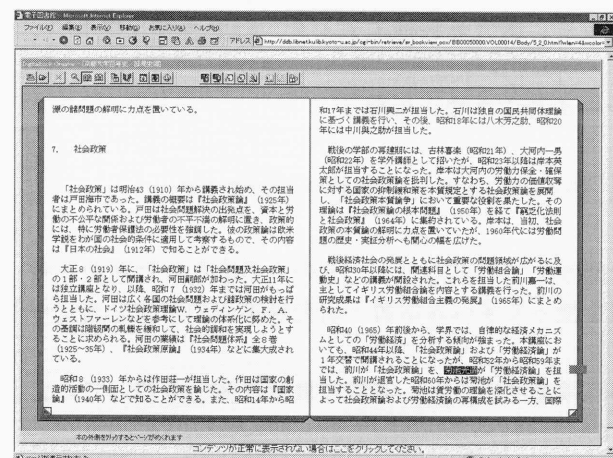
(1) ブックメタファ画面



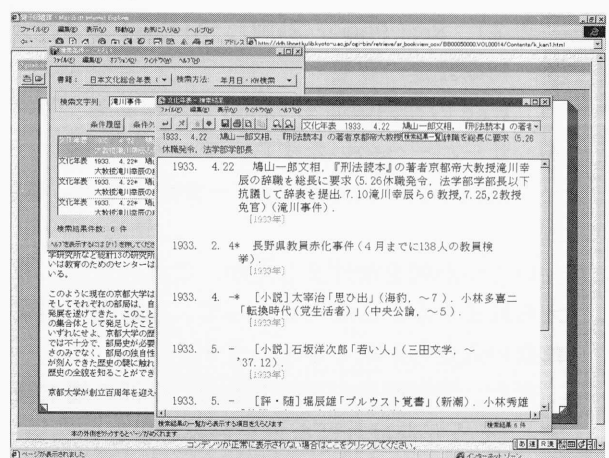
(4) 機械翻訳画面



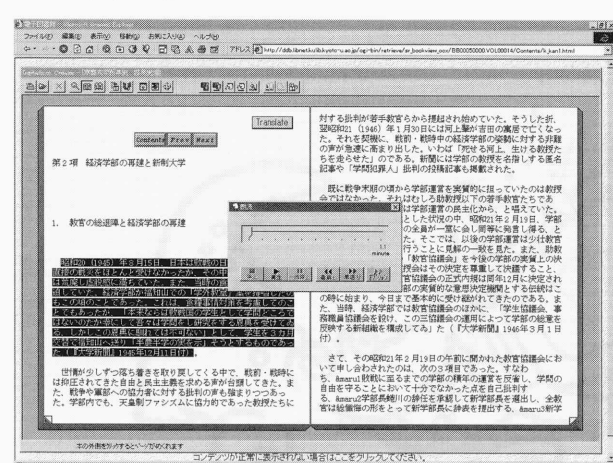
(2) 付箋画面



(5) 辞書参照画面



(3) 音声朗読画面



附属図書館内設置端末機利用についてのお願い

—マナーを守って学習・研究の便利な道具に—

附属図書館では、1階、2階、3階に端末機を設置しています。

1階：OPAC・CD-ROM検索用、電子図書館専用端末

2階：インターネット用端末

3階：インターネット用端末と総合メディアセンター・オープンスペースラボ
(25台)

最近、これらの端末の一部が意図的に破壊されたり、端末を使いたくて多くの人が待っていても、ゲームに熱中する一部の人に占有されるなど困った事態が起こっています。

いくつか事例をご紹介します。当然ごく一部の人の問題ですが、利用者の皆様に快適に端末機を利用していただくため、皆様のご理解・ご協力をお願いします。

1. ゲームセンターまがいの、長時間ゲームによる端末機占有
2. 各種ゲームソフトその他ハードディスクに不要なソフトウェアのインストール
麻雀ゲーム等各種ゲームソフト等、WinZip(圧縮・解凍)、Lhasa(解凍)、Quick Time(映像・画像)、Real Player(動画)、Al-Mail等各種メーカー、秀丸等各種エディタ、FTP各種ソフト
3. 初期設定の変更
Webの初期画面をyahoo等に変える、タイマーの設定を変える等
4. サーバーへのいたずら、データの破壊
CA on CDの1998年のデータがいたずらされ、多くの利用者にご迷惑をかけました。

いくつか例を挙げましたが、これらはほんの一部です。おそらく一部の人の心ない行為だと考えられますが、これらによって、図書館の端末機を使ってすべき学習・研究等本来の目的を達せられない人たちがたくさんいます。

また、図書館員が毎朝開館前に全部の端末機の点検をするなど、非常に無駄な労力を使っています。(そうしなければならぬほど事態は深刻です)

このような事態が続けば、附属図書館として具体的な規制をしなければなりません。ごく一部の人の行為によってそのような事態になるのは避けたいと思っています。

マナーを守り、「附属図書館にある端末機は、自分一人のものではない。」という当然の良識を持って附属図書館の端末機をご利用いただくようご理解・ご協力をお願いします。



教官寄贈図書一覧 (平成 9 年度下半期未掲載分)

身分	寄贈者氏名	寄贈図書名	出版社	出版年
助教授	足立芳宏	近代ドイツの農村社会と農業労働者	京都大学学術出版会	1997
教授	稲垣直樹	ヴィクトル・ユーゴーの世界	ヴィクトルユゴーの世界 展カタログ委員会	1996
教授	稲垣直樹	アレクサンドル・デュマ	清水書院	1996
教授	大西 広	環太平洋諸国の興亡と相互依存	京都大学学術出版会	1998
助教授	金子周司	医学・生物学のためのライフサイエンス辞書	羊土社	1997
教授	上林彌彦	Cooperative Databases and Applications	World Scientific.	1997
教授	上林彌彦	Information Systems and Technologies for Network Society	World Scientific Pub.	1997
教授	小林四郎	Catalysis in Precision Polymerization	WILEY	1997
教授	祖田 修	国際農業紛争	講談社	1993
教授	祖田 修	持続的農村の形成	富民協会	1996
教授	祖田 修	地方産業の思想と運動	ミネルヴァ書房	1980
教授	祖田 修	都市と農村の統合	大明堂	1997
総長	長尾 真	近世上方大工の組・仲間	思文閣	1997
総長	長尾 真	ハンディブック コンピュータ	オーム社	1997
総長	長尾 真	大漢和辞典 全 13 巻・索引	大修館書店	1986
総長	長尾 真	The Oxford English Dictionary 全20巻	Oxford Uni.	1989
総長	長尾 真	日本語語彙体系 全 5 巻	岩波書店	1997
総長	長尾 真	衛星通信	オーム社	1997
総長	長尾 真	信号画像のデジタル処理 ほか192冊		
教授	林 力丸	High Pressure Research in the Biosciences and biotechnology	Leuven Univ. Press	1997
教授	船越満明	キーポイント フーリエ解析	岩波書店	1997
教授	松波弘之	Silicon Carbide and Related Materials	Institute of Physics Pub.	1995
教授	間野英二	バーブル・ナーマの研究 2 総索引	松香堂	1996
教授	万波通彦	隠れたる日本の実力企業	現代書林	1993
教授	万波通彦	河野卓男 学研都市と京都の未来	(株)地域計画建築研究所	1995
教授	万波通彦	国立大学ルネサンス 1. 2	同文書院	1993
教授	万波通彦	JUAA 選書 3. 4. 5. 6. 7 他 5 冊	(財)大学基準協会	1997
教授	南川高志	ローマ五賢帝	講談社	1998
名誉教授	山川裕巳	Helical Wormlike Chains in Polymer Solutions	Springer	1997
助教授	横山 俊夫	21世紀の国立図書館—国際シンポジウム記録集—	日本図書館協会	1997

***** 図書館の動き *****

AV ホールの機器が一新されました

昨年11月、AV ホールにマルチメディア対応のシステムが整備されました。このシステムの導入により、全ての AV ソースがデジタル変換され、高解像度プロジェクターや ATM による受配信、SCS による遠隔テレビ会議ができるようになりました。

既に、Web Technology に関する国際会議はじめ講演会等に利用されています。利用に関するお問い合わせは、総務課庶務掛（2613）までどうぞ。

主な機器

- ビデオカメラ（3台）

- 全世界対応ビデオ装置
- スライドフィルムコンバータ
- デジタル書画カメラ
- S-XGA 対応高輝度・高解像度プロジェクター（2台）

車椅子対応の入退館装置が完成

以前より要望のあった「職員の介護なし図書館利用」を可能にするために、昨年10月に車椅子対応の入館ゲートを設置いたしました。

ゲートの間隔は1200mm で、フラPPER型両開き方式となり安全対策を重視した装置です。十分に車椅子での入退館が可能になりました。

***** 目 次 *****

Classics in the Libraries of Kyoto University	1
古代メソポタミアの粘土板	2
イギリスの図書館ネットワーク：英国図書館・イギリスの大学図書館訪問記①	4
経済学部図書室紹介—シリーズ京都大学図書室巡り	8
物理学教室図書室における図書貸出・返却新システムの稼働	10
外国語雑誌目次データベース (SwetScan) の提供を始めました—利用の手引きシリーズ	11
DigitalBook Creator の提供を始めました—利用の手引きシリーズ	12
附属図書館内設置端末機利用についてのお願い	14
教官寄贈図書一覧—平成9年度下半期末掲載分	15
図書館の動き	16
編集後記	16

編集後記

今回は、「静脩」に初めて英文記事を掲載します。海外図書館見学記・訪問記も前回に引き続き掲載しました。インターネットにより世界がますます身近になりました。

全学の事務機構改善の検討が開始されます。附属図書館も百周年を迎えます。新たな世紀に向け、図書館とは何かを足元から見つめ直し、合理化・省力化そして国際化を検討していかなければならないようです。(み)